

夏とおじいさん

小川未明

青空文庫

ある街まちに、氣きむずかしいおじいさんが住すんでいました。まった
く、独ひとりぽっちでおりましたけれど、欲よく深ふかなものですから、金かね
をためることばかり考かんえていて、さびしいということなど知しりま
せんでした。

「おじいさんは、おひとりで、おさびしくありませんか？」と、
独ひとり者もののおじいさんの身みの上うえを思おもって、なぐさめるものがあると、
「仕事しごとにいそがしいから、そんなことは考かんえませんよ。」と、お
じいさんは、さびしいとか、さびしくないとかいうのは、閑人ひまじん
のいうことだとばかりに返事へんじをしました。

「それは、お元氣げんきで、なによりけっこうなことです。」と、たず

ねた人は、金かねがもうかれれば、さびしくもないものとみえる、さすがに、金持かねもちはちがつたものだと思おもいました。

おじいさんは、雇やとい人にんを手足てあしのごとく使つかいました。雇やとい人にんたちは、おじいさんの気きむずかしやを知しっていていますから、せつせといいつけどおり働はたらいたのです。そして、自分じぶんの思おもつたように物事ものごとがうまくゆけば、にこにことして、おじいさんは、きげんがよかつたけれど、うまくゆかないときには、

「おまえは、気きがつかん、ばかだから。」といって、がみがみしかつたのであります。

雇やとい人にんは、たまりかねて、

「あんなわからずやには、罰ばちがあたればいい。」と、思おもつていま

した。ところが、おじいさんはリユーマチの気味で、夏のはじめごろから、手足がよくきかなくなりました。

「とうとう、神さまが、罰をおあてなされたのだ。これからは、私どもにもやさしくしてくださるだろう。」と、雇い人たちは、いったのであります。

ところが、その反対で、体こそよく自由はきかなかつたが、ますます口やかましくなつて、それに自分が不自由で、思うようにならぬところから、かんしやくを起こして、使っているものに、小言をいったのです。

それでも、みんなは、「病 人だから、だまつておれ。」と、我慢をしていました。

日にまし、あつくになると、はえや蚊かが、だんだん多く出てきました。はえは遠慮えんりよなく、おじいさんのはげた頭あたまの上にとまりました。

「この畜生ちくしようめ。」といつて、おじいさんは、うちわを頭あたまの上
にやって、はえをたたこうとしました。はえは、すばしこく逃にげ
て、また、おじいさんがじつとしていると、頭あたまの上うえにきてとまり
ました。

「ふといやつだ、おれをからかっているな。」と、おじいさんは、
顔かおを赤あかくして怒おこりました。しかし、はえのことですから、怒おこつて
みるだけで、どうすることもできません。

また、晩ばんになると、蚊かがやってきて、おじいさんを、ちくちく

と刺さしました。

「おれが、手足てあしがきかないと思おもつて、蚊かまでがばかにする。」と、おじいさんは、怒おこったのであります。

はえや、蚊かに對たいする腹はらだたしさが、つい雇やとい人のほうへまわつてきましたから、たまりません。せめて、この夏なつの間あいだなり、涼すずしい山やまの温おん泉せんにでもまいられたらといつて、おじいさんにすすめました。

おじいさんは、いい考かんえだといつて、喜よろこぶと思おもいのほか、「仕事しごとのいそがしい体からだで、そんなところへゆけるものか？ 私わたしは、あのビルディングの五階かいの事務所じむしょで、夏なつを過すごすつもりだ。」と、答こたえました。

「なるほど、それは、いいお考えかんがでございます。」と、温泉行おんせんゆきをすすめた雇い人やとにんは、頭あたまをかいて下さがりました。

おじいさんは、いよいよビルディングへ移うつつて、高たかい五階かいの室しつで住すむようになつてから、はたして、はえも、蚊かもこなければ、涼すずしい風かぜがはいつて、それはけっこうでありました。

「なぜ、早はやくここへこなかつたらう。」と、おじいさんは、大おお喜よろこびでしたが、雇い人やとにんは、ますます手足てあしのごとく使つかわれて、上あがつたり、下おりたりするので、ほんとうにやりきれなくなりまし
た。ちようど、そのおりのことです。ビルディングのエレベーターに故障こしょうができて、止とまつてしまった。その修繕しゅうぜんには、五、六日にちかん間かんかかるそうです。雇い人やとにんたちは、頭あたまを集あつめて、

「こんなときにも、おじいさんを困らして、平常、手足の
 ように働いている、みんなのありがたみを知らしてやれ。」と、
 相談しました。

それで、みんなが、仕事を休んでしまうと、体の自由がきかな
 いおじいさんですから、まったく困ってしまいました。

「不埒のやつどもだ。よくも、私をひどいめにあわしたな。」と、
 おじいさんは、怒りましたけれど、よく考えれば、自分が無理だ
 ったので、いつでも、みんなが、自分のどんな命令でもきくも
 のと思ったからです。

「そうだ。おれは、もつと謙遜にならなければならぬ。そし
 て、人を信じなければならぬ。この世の中は、おたがいに助け

あ
合
わ
な
け
れ
ば
な
ら
ぬ
と
こ
ろ
だ。」と、悟さとりました。

おじいさんは腹はらがへると、かごの中なかへ、紙片かみきれに字じを書いて、それといっしょに銭ぜにをいれて、細ほそひもで、するすると五階かいの窓まどから、下したの通とおりへおろしました。その紙片かみきれには、

「もし、このお金かねで、パンを買かって、この中なかへいれてくださればしあわせです。そして、あなたの手間賃てまぢんもお引ひきください。」と、書かいてありました。

おじいさんは、しばらくして、かごを引ひき上げると、その中なかには、できたてのやわらかなパンがはいつていました。そして釣つり銭せんも、ちゃんとはいつていたのです。

赤あか々あかとした、夏なつの太たい陽ようは、高たかいビルディングと、人ひとの歩あゆむ

しろ^{みち}路をいきいきと彩^{いろど}り、照^てらしていました。おじいさんは、正^{ただ}しい道^{みち}を悟^{さと}ったばかりに、それから、雇^{やと}い人^{にん}にも尊^{そん}敬^{けい}され、ひとりぼっちでさびしくなく、体^{からだ}がきかなくても、何^{なに}不^ふ自由^{じゆう}なく、暮^くらすことができたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「國民新聞」

1931（昭和6）年7月12日

※表題は底本では、「夏《なつ》とおじいさん」となっています。

※初出時の表題は「夏とおぢいさん」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：津村田悟

2018年7月27日作成

2018年9月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夏とおじいさん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>